

農学部・農学研究院

I	研究の水準	研究 11-2
II	質の向上度	研究 11-5

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 研究基盤整備に関する方針（インフラストラクチャー・ポリシー）、研究組織運営に関する方針（マネジメント・ポリシー）、研究成果に関する方針（アウトカム・ポリシー）に基づいて、独自のサバティカル（特別研究期間）制度や短期集中型研究支援制度の実施、独自のリサーチ・アドミニストレーター（URA）の設置による研究企画支援・コーディネーション体制の強化、「平成25年度女性枠設定による教員採用・養成システム」での支援等、研究支援の体制を整備している。
- 平成22年度から平成26年度における原著論文数は平均609件、教員一人当たり3.6件となっている。また、著書は平均71件、総説は平均76件となっている。
- 平成22年度から平成26年度における学会発表は1,671件、そのうち国際学会等での発表は380件となっている。
- 平成22年度から平成26年度における、科学研究費助成事業を含む外部研究資金の採択状況は、平均448件（平均約15億8,600万円）となっている。

以上の状況等及び農学部・農学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況**〔判定〕 期待される水準を大きく上回る****〔判断理由〕**

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に植物分子・生理科学、応用分子細胞生物学、木質科学、食品科学において卓越した研究成果がある。受賞件数は、平成16年度から平成19年度の平均34件から、平成22年度から平成26年度の平均72件へ増加しており、次世代研究スーパースター養成プログラムによって育成した研究者や女性枠により採用した研究者が文部科学省若手科学者賞を受賞している。また、食品機能デザイン研究センターの設置につながった「緑茶カテキンの生理機能発現メカニズムの解明とその応用展開」等、拠点形成に結び付いた研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、植物分子・生理科学の「植物の光情報利用における新奇機構の発見」、応用分子細胞生物学の「植物オルガネラで働くRNA結合タンパク質の機能解析」、木質科学の「樹木多糖のナノアーキテクトニクスに基づく新材料創発研究」、食品科学の「緑茶カテキンの生理機能発現メカニズムの解明とその応用展開」がある。そのうち「樹木多糖のナノアーキテクトニクスに基づく新材料創発研究」については、平成22年度日本学術振興会賞、平成24年度セルロース学会賞、平成25年度繊維学会賞を受賞している。また、「緑茶カテキンの生理機能発現メカニズムの解明とその応用展開」については、平成22年に日本食品免疫学会賞、平成27年に日本学術振興会育志賞を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に応用分子細胞生物学、水圏生命科学において特徴的な研究成果がある。また、大学ブランド牛「QBeef」、果実ブランド「みつしずく」等、製品化を通じて研究成果の社会への還元を図っており、地域産業の特色を踏まえた地域貢献に取り組んでいる。
- 特徴的な研究業績として、応用分子細胞生物学の「RNA結合型PPRを利用したカスタムRNA結合タンパク質の開発と利用」、水圏生命科学の「棘皮動物におけるホルモンによる生殖の制御機構の解明と応用」がある。

(特筆すべき状況)

- 学術面では、特に植物分子・生理科学、応用分子細胞生物学、木質科学、食品科学において卓越した研究成果がある。受賞件数は、平成 16 年度から平成 19 年度の平均 34 件から、平成 22 年度から平成 26 年度の平均 72 件へ増加しており、次世代研究スーパースター養成プログラムによって育成した研究者や女性枠により採用した研究者が文部科学省若手科学者賞を受賞している。また、食品機能デザイン研究センターの設置につながった「緑茶カテキンの生理機能発現メカニズムの解明とその応用展開」等、拠点形成に結び付いた研究成果がある。
- 社会、経済、文化面では、特に応用分子細胞生物学、水圏生命科学において特徴的な研究成果がある。また、大学ブランド牛「QBeef」、果実ブランド「みつしずく」等、製品化を通じて研究成果の社会への還元を図っており、地域産業の特色を踏まえた地域貢献に取り組んでいる。

以上の状況等及び農学部・農学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、農学部・農学研究院の専任教員数は 165 名、提出された研究業績数は 37 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 37 件（延べ 74 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 5 件（延べ 10 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 5 割となっている。

(※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和)

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目 I 「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- インフラストラクチャー・ポリシー、マネジメント・ポリシー、アウトカム・ポリシーに基づいて、独自のサバティカル制度や短期集中型研究支援制度の実施、独自の URA の設置による研究企画支援・コーディネーション体制の強化、「平成 25 年度女性枠設定による教員採用・養成システム」での支援等、研究支援の体制を整備している。
- 平成 22 年度から平成 26 年度における原著論文数は平均 609 件、教員一人当たり 3.6 件となっている。また、著書は平均 71 件、総説は平均 76 件となっている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度における学会発表は 1,671 件、そのうち国際学会等での発表は 380 件となっている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度における、科学研究費助成事業を含む外部研究資金の採択状況は、平均 448 件（平均約 15 億 8,600 万円）となっている。

分析項目 II 「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学会賞の受賞件数は、平成 16 年度から平成 19 年度の平均 34 件から、平成 22 年度から平成 26 年度の平均 72 件へ増加しており、次世代研究スーパースター養成プログラムによって育成した研究者や女性枠により採用した研究者が文部科学省若手科学者賞を受賞している。
- 食品機能デザイン研究センターの設置につながった「緑茶カテキンの生理機能発現メカニズムの解明とその応用展開」等、拠点形成に結び付いた研究成果がある。
- 大学ブランド牛「QBeef」、果実ブランド「みつしずく」等、製品化を通じて研究成果の社会への還元を図っており、地域産業の特色を踏まえた地域貢献に取り組んでいる。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 研究基盤整備に関する方針（インフラストラクチャー・ポリシー）、研究組織運営に関する方針（マネジメント・ポリシー）、研究成果に関する方針（アウトカム・ポリシー）に基づいて、独自のサバティカル（特別研究期間）制度や短期集中型研究支援制度の実施、独自のリサーチ・アドミニストレーター（URA）の設置による研究企画支援・コーディネーション体制の強化、「平成 25 年度女性枠設定による教員採用・養成システム」での支援等、研究支援の体制を整備している。